

自己確立への希求と挫折

——*Work Suspended*のJohn Plantが抱える諸問題

山 崎 麻由美

Quest for Self-realization and Failure in Self-fulfillment: Problems with John Plant in *Work Suspended*

Mayumi YAMASAKI

SUMMARY

John Plant in *Work Suspended* is emotionally in bondage to his father. Plant lives in seclusion and remains aloof from other people, which shows not shyness but bloodlessness and immaturity in his personality.

His father's death seems to have liberated him from his father. To overcome his problems concerning with his immaturity, he should not shrink from involvements with other people.

There are two characters who would affect Plant's personality : Lucy Simmonds and Arthur Atwater. Lucy, who is serious and innocent, could have led him to his self-realization. However, her being the wife of his friend and with child prevent her from serving as a guide for his fulfillment. Plant gives up confronting and conflicting with Atwater, who has killed his father, and who is his double in some ways. Thus his chance to become a mature person is lost and gone forever.

はじめに

Evelyn Waughは1939年7月22日の日記に“I have rewritten the first chapter of the novel about six times and at last got it into tolerable shape”¹⁾と記している。これは後に未完のまま出版する事になった*Work Suspended*²⁾についての記述である。この作品は未完にはなったが

Waughの作品では初めての一人称小説であり、日記の記述からも苦心して作品に取り組んでいる様子が窺える。³⁾一人称小説という事からこの作品は自伝という観点でのみ分析できるという評論もある。⁴⁾しかし、*Work Suspended*は自伝的要素を考慮に入れずとも、興味深い問題をいくつか抱えている。その一つが主人公John Plantの人物像である。彼は*Decline and Fall*(1928)の主人公Paul

Pennyfeatherの流れをひく受け身な主人公の一人であり、その消極的な生き方は次の一人称小説 *Brideshead Revisited* (1945) の語り手 Charles Ryder へと受け継がれていく。⁵⁾ また *Work Suspended* には Waugh がそれまでの作品を通して表してきた「家」の問題を——建物としての「家」と「家」が象徴する「家庭」の両方を含んでいる——John Plant が「家を探す」という具体的な行為で描いている。⁶⁾ 消極的で人間として成熟していない主人公の John Plant と「家」の関わりを論じることで、彼が成長する可能性がどこに潜んでいたのかが明らかにされる。また1942年版 *Work Suspended* の章題は “My Father's House” と “Lucy Simmonds” であり、1949年版で Waugh はそれらを変更して “A Death” と “A Birth” と改めている。これらの章題に使われた言葉は John Plant の問題を追う上での手がかりになると考えられる。本稿では John Plant が父親や Lucy Simmonds とどのように関わっているのか、あるいは誕生や死を経験することで彼らとの関係がどのように変化したのか、そしてそれが John Plant の人間的成長にどのように影響したのかを考察していく。

1 父親との関係

John Plant は34才(1942年版では33才)の作家である。彼が作家になろうと決めたのは21才の時だった。彼は確かに書く事が好きで生まれつき独創的で建設的な性格だった。しかし自然に作家の道に進んだのではなく、職業として「慎重に選んだ」のであった。推理小説作家になったのは、推理小説は「よく売れる」し「自分が敬愛する人々にも読んでもらえそうで」しかも「自分というものを作品に入れる」必要がなかったためであった。⁷⁾ 「自分を表に出したくない」というのは彼の性癖の一つでもある。それは彼が作品を書くために身を潜める場所をいくつも持っていた事実からも窺うことが出来る。また分不相応に所有しているおびただしい数の帽子の保管場所に困ったという挿

話(131)は、帽子が「人の正体を隠す」事を象徴している⁸⁾ ことを考えればただの滑稽な場面として見過ごすわけにはいかないだろう。さらに皮肉な事に、自分を投影していないはずの作品にも彼の人間性が実に良く現れているのである。1942年版で彼は自分の作品に出てくる犠牲者は “My corpses, invariably, were male, solitary high position in the world and, as near as possible, bloodless” (214) だとしている。犠牲者の社会的地位が高いことから作者の俗物根性が垣間見えるし、bloodless という言葉はいみじくも Plant の冷血さをも表わしているのである。1949年版では Waugh は Plant の作風に関する記述を大幅に削除している。あまりにもあからさまだと考えたからだろうか。確かに42年版にある自作の方法論を読む限り Plant の作品に魅力は感じられない。筋書きのみならず登場人物まで緻密に計算されていて面白味に欠けるのである。「作品を発表するたびに前の作品より売れ行きが良い」(106) という事実には首をかしげざるを得ない。

John Plant の父親は画家である。その画風や画題からラファエロ前派風の絵を想像することができる。しかしその情緒的で物語的な画題や作品とは裏腹に、父親は “methodically” に描く事を良しとしていたのである。未完の遺作となった作品も「キャンバスの左側から右側へむけて」(128) 最後の仕上げが進んでいた。父親の言動はエキセントリックで服装も世間が思い描く「芸術家」のイメージそのものであったが、その制作ぶりから芸術家よりは勤勉な職人の姿が浮かび上がってくる。息子も、父親が絵を描くと同じように “methodically” に作品を書いていた。その点で彼もまた芸術家と言うよりは職人だった。John Plant は父の死後、まとまった額の遺産が手にはいると創作意欲を失ってしまう。生活費を得る為に「書く」必要がなくなったためである。

Plant 父子はお互い干渉せず独立した生活を営んでいる。父親は “Family love and financial

dependence don't go together.” (112)と断言し、息子が親を頼らず生活している事を喜んでいる。John Plantと父親には葛藤も憎しみもなく、一見して穏やかで平和な関係が続いていた。しかし、父との絆が希薄だったことがかえって彼の人間としての成長を妨げていたといえるだろう。更に上で挙げたJohn Plantの情に欠ける冷たさも、父親と充分関わる事がなかったためと考えられる。

父親との関係は表面的には穏やかなものであったが、Jeffrey Heathが指摘するように彼は父から縛られていたのである。“In his constant retreat from responsibility, Plant is only the latest in a long line of Waugh protagonists who are imprisoned by their immaturity--immaturity which has fallen to them from the lax hands of their fathers”⁹⁾ 父親は自分の事を絶滅した鳥ドードーに喩え、息子はドードーの“petrified egg”だと言う(111)。雛が孵ることのない化石になった卵の比喩は、John Plantの人格の成長が望めない事を言い得ている。

彼は父親と対峙する事なく父と死別してしまうために、その束縛を直接断ち切る機会を失った。いまやJohn Plantが父の影響から逃れ真に自立するために残された唯一の方法は、父親に関する過去と決別する事である。彼が書きかけの小説を仕上げる事が出来なかった事も父との決別の可能性を示す一つの形である。書き上げるつもりだったのだが、以前の熱意が戻ってこなかった為結局は書く事を断念する。彼は出版社に断りを入れに行き、そこで今の自分は「重大な転機にさしかかっているのだ」と言う。とまどう編集者に向かって彼は次のように説明する。“I am in danger of becoming purely a technical expert.... He [Plant's father] spent his whole life perfecting his technique. It seems to me I am in danger of becoming mechanical...” (130)。それまで父親と全く同じ規則正しい方法で作品を仕上げている彼が、父の死後初めてその仕事ぶりを批判の

目で眺めたのである。そうすることで同時に自分の欠点にも気付いたのだった。彼は“I need new worlds to conquer.” (130)と新たな一歩への意気込みを見せる。ただ、忘れてはならない事は、彼が小説を書くのをやめることが出来た大きな理由は、暮らしていけるだけの遺産を父親から受け継いだためである。編集者はそのことを看破したが、結局父の金に依存しながらの自立であることにPlant自身は気付かないのである。

父の家の売却を決めた事も父からの精神的自立へ踏み出した事を表している。父親の存命中も彼はいつとはなく父の家を出て暮らしていたし、父が亡くなる前の5年間に併せても10日しか父の家に泊まっていない。しかしそれにもかかわらず父親が住んでいた家との結びつきは強い。“I realized, the house had been an important part of my life” (118)であったし、“In the house my memories had been all of myself” (129)だったのである。また彼が父の家を訪ねた時、そこで初めて父の死に対する哀惜の念にのみ込まれたことから、Plantにとって「家」のもつ力は非常に強いことがわかる。19世紀半ばに建てられた重厚な造りのその家が父親を象徴していることは明白である。また家のあった場所がSt John's Woodであったことも彼の名がJohn Plantであることを考えれば、単なる偶然とは思えない。

Plantは父との思い出にしばし浸ったあとで、父のものは何も持ち出さず生前通りにして家を去り、父の家の売却を決める。そしてこれから、自分自身の「家」探しが始まるのである。自立した責任ある人間としての生活を始めるために心の拠り所となる「家」を手に入れなければならない。執筆滞在中だったモロッコで、彼は「自分は妻と六人の子供をイギリスに残してモロッコに出てきたナツメヤシ商人だ」となじみの娼婦に偽りの身の上話をしている。小説家Plantのささやかな作り話である。しかしナツメヤシという手に触れることの出来る品物で人と取引をし、金を稼ぎ、大

家族を養う生活こそ、人との関わりを避けて暮らしながら虚構を紡ぎ出すことで生計を立てるよりはるかに健全と言えるだろう。Plantはこれまでのように人目を避けて「隠れ家」に移り住んでいた生活をやめて、ひと所に定まった自分の「家」を手に入れなければならない。そしてそこで世間と関わりを持ちながら生活していくことが彼には必要でなのである。

2 心の拠り所を求めて

父の死後しばらくクラブで落ち着かない生活していたPlantは、大学時代からの友人で作家でもあるRoger Simmondsに住まいを探す相談を持ちかける。Rogerはいとも簡単に「田舎に静かで良い家を買えばいい」と言う。その後平然と「僕にも子供が生まれる時どこかに泊まれるところが欲しいからね」と付け加える(133)。絶えず来客があるRogerにすれば当然の発言であった。しかしプライバシーを大切にしたいPlantは家が腰を落ち着けることの出来る場所になるところか、他人が侵入してくる度に別の場所を探す“perpetual flight and perpetual siege”(133)になる恐れを感じる。彼が求めているのは、自分だけの「家」であり、部外者達と共有するつもりはない。他人が自分の「家」に押しかけてくるのはPlantには困った事なのだ。侵入者がたとえ友人達にせよ、Plantにとっては自分の「家」が侵入の危険にさらされると感じるのである。

しかもRogerと友人達は自分たちの好みの家をPlantに買わせるつもりになっている。それはPlantの精神的自立への干渉を意味する。ある夜Rogerは18世紀の銅版画を取り出して見せ、これこそまさにPlantのためにあるような家だ、と言出し、同席の友人達も同意する。その銅版画には“A Composed Hermitage in the Chinese Taste”という題がついており、Plantの感想は“a preposterous design”(144)であった。そしてその家は“just the house one would want someone

else to have”(144-45)であると理解する。他人に無理強いされていかにも住み心地の悪そうな家に住むことは、ドードー鳥であった父親が彼に「化石になった卵」の状態を強いていたのと同じ状況である。

このように孤立無援状態で圧力をかけられているPlantを救い出したのがRogerの妻Lucyだった。彼女はきっぱりと“I can't think why John should want to have a house like that”(145)と言い放つのである。そしてPlantはお節介な友人達の介入を避けてLucyと二人で田舎に家を探しに出かける事になる。

Lucyは生真面目で素朴な人柄の女性だった。Plantが友人と初めて彼らの新居を訪ねた時、Lucyは突然家にやってきた彼らをいやな顔もせず招き入れる。Plantを動揺させたのは、Lucyが初対面の彼をごく自然に“John”と呼んだ事であった。彼は初めて出会った自分に対して警戒心も持たずに自然な親しさで接してくるLucyに戸惑いを覚える。彼女がせめて他人行儀な距離をおいて“Mr Plant”と呼びかけてくれれば良かったのにと腹立たしくさえ思う(152)。しかし彼女にとって夫の友人は家族同然だったのだ。こうしてLucyは無造作にPlantの心に踏み込んでいった。自分の内面を他人の目にさらす事を避けて暮らしてきたPlantには、Lucyがいとも簡単に自分の心に触れたのが衝撃だったのである。そのため、彼はことある事にLucyに対して腹を立て、彼女に失礼な口をきいたり、冷淡な振る舞いをする。だがLucyは意に介せず、Plantに対する親密な態度は変わらない。Lucyをよく知るようになるにつれ、Plantは彼女が友人達に隔てなく寄せる深い信頼感を知り、心打たれる。彼は今までそのような友情を経験した事がなかったのである。

やがてPlantは自分がLucyを愛している事を認める。それまでPlantは自分の作品で愛を「強欲、妬み、復讐」と結びつけて描いていた。愛情は、彼の作品中、行動のやむにやまれぬ動機であり、

あるいは正義への報酬として与えられるだけのものであった。また実生活ではそれまでつき合いのあった女性達は、若い頃に一緒に馬鹿騒ぎをして今では名前も覚えていないガールフレンド達、あるいは娼婦達であった。愛とは“a game of profit and loss” (149)だったのである。父親にさえ距離を置いて接していたPlantが、初めて真摯に女性を愛するようになったのだ。彼はこうして自分の感情と向き合う機会を得たのであった。父親に「化石になった卵」と言われたPlantが、Lucyを愛することでその殻を破る可能性を見出したのである。

Lucyという名が「光」を意味する事からも、彼女がPlantの導き手になることを象徴していることは明らかである。彼の姓と並べてみれば、彼女の名前のもつ象徴性はより明確になる。「植物(plant)」は光へ向かって伸び、光なしでは健全に育たない。Plantは当時を振り返り、彼女を愛していると自覚するきっかけになったのが彼女の言葉“I can't think why John should want to have a house like that” だったかもしれないと考える。先に述べたようにLucyは夫や友人達がPlantに勧める家が気に入らず、この言葉がきっかけで彼女はPlantの家探しの相棒となるのである。また彼がこの言葉を作品中三度も繰り返していることから(145、161、166)、深い意味をもつ言葉だったことが窺える。つまり彼女が彼の導き手となったことと彼女を愛するようになったことが、共に家を求めることから始まったのである。

Plantにとって「自分の家」を探し出し、自分のものにする事は自立を象徴している。その実現に向けて彼を行動へ踏み出させたのはLucyだった。それまでは具体的な行動を起こしていなかったPlantが、彼女と共に何度も田舎に出かけて物件を検分するのである。“I began, almost at once, to spend the greater part of the day in her company, and as my pre-occupation at the time was in finding a house that quest became the

structure of our friendship” (169)

しかしPlantが望む家とLucyの好む家は異なっていた。都会の家々は“camps”であり田舎の家々は“permanent”である(143)と考えるPlantは少なくとも築100年の家を求めている。それは「別荘(a cottage)」ではなく「家(a house)」でなければならない。しかもその家には「地下室、二つある階段、高い天井、居間には大理石の炉棚、玄関の所で車の向きを変える事が出来るスペース、馬車置き場と厩、壁をめぐらした家庭菜園、パドック、そしてどっしりした木が一本か二本」(172)があることがPlantの理想であった。しかしLucyの好みは“a womanly love of sunlight and a Marxist faith in the superior beauties of concrete and steel”であった(172)。人の心を家に喩えるとLucyの飾り気のない心は“...to be admitted, as it were, through a door in the wall to wander at will over that rich estate” (168)だとPlantは考える。敷地内のあちこちに「立ち入り禁止」の札を貼っているような世間一般人の心のあり方とは違っても述べている。PlantはLucyの開け放しの心を尊び愛している。しかし、家探しを始めても好みが違うという溝は埋まらない。Plantには自分の計画を変えるつもりはない。彼はLucyに自分の考えを理解してもらうために、フランス人作家や19世紀のイギリス人作家達の生き方を引き合いに出すが、彼女にはPlantの家探しの目的が“grotesque”だとしか思えない。彼女は田舎暮らしの金持ちをおぞましく思っているのである。こうして彼らはお互いを理解する努力もせず、考えは平行線のままであるのに、狐狩りを楽しむような感覚であちこちに出かけていく。

このような状態でPlantが望みを達成できるはずはない。ついに踏み出した一歩であったが、Lucyと心をつなぐことは出来ず、またそのための葛藤も対立もない。波風の立たない穏やかなつき合いはかつての父親との関係そのものである。彼がついに自分の希望の家を見つけ購入した

時、Lucyは出産のため同行できなかつた。彼女は不満を漏らすしPlantは“*It seemed quite natural that she should reproach me. She had a share in my house*” (174)だと考える。ようやく探し当てた家だったが、彼はそこに住むことはおろか一晚の滞在もすることもなかつたのである。間もなく第二次世界大戦が始まり、彼の家は接収され妊婦達の避難所になる。Lucyを招き入れることの出来なかつた家が皮肉な形でPlantの夢を成就させたとも言えるだろう。しかしその後その家は徐々に汚れ崩れていく運命をたどるのである。興味深いのは、彼が自分の家に足を踏み入れることがなかつたこと、そして家を手に入れた時期とLucyとの親密な関係が終わりを告げる時期が同じであったことである。このことは自分の家を探しそこで生活することが自立を象徴している事を考え合わせると、自立を確たるものにするためにLucyとの関係がいかに重要であったかをよく表している。彼女の存在なくしてはPlantの精神的成長も望めなかつたのである。

それでは、何故LucyはPlantの導き手としての象徴的な使命を果たすことが出来なかつたのだろうか。結局、LucyにはPlantの存在は友人に過ぎなかつたためである。彼女は夫を愛しており、忙しい夫と触れあうことが少なく淋しかったために、夫と親しいPlantを友人に選んだ。彼女を愛していたPlantと夫だけを愛していたLucyでは出発点から心のありようが違っていたのである。しかしそれだけならPlantの関わり方次第でLucyの心も変わったかもしれない。なぜなら作家である夫Rogerが忙しかつたのは、今まで書いたことがない推理小説を執筆中だつたからである。それというのもLucyがPlantの作品を芸術作品だと褒めそやしたので、Rogerの対抗意識が燃え上がったためであつた。作家という同じ土俵に立っていれば推理小説家として一日の長があつたPlantにもLucyの愛情を得る可能性があつたかもしれない。しかしLucyに子供が生まれることで二人の関係

は決定的に壊れてしまう。Plantの目にLucyは“*faultless*” (152)と映り、McDonnellが指摘するように「聖母」の様な存在だつた(McDonnell 103)。Plantが初めてLucyと出会つた時、彼女は妊娠5ヶ月であつた。妊婦である人妻を愛するPlantは、神の子を宿したマリアを見守るヨセフさながらある。しかしLucyが生んだ子供はPlantの救い主にならなかつたのである。子供が生まれるまでは、彼女は身重の自分が思うようにPlantと家探しに出かけられなくなることを嘆き、お腹の赤ん坊を“*Damn this baby*”と呪つていた(174)。赤ん坊が生まれてきたら動物園にいた薄汚い猿と同じ名前を付ける、とまで言つていたのである。しかし赤ん坊が生まれると同時にLucyの関心と愛情はそっくり子供に移り、Plantは眼中になくなる。Lucyの赤ん坊の誕生はPlantのその後の人生と皮肉な対比を表している。彼女が自ら「家」となつて子宮で育ててきた赤ん坊はこの世に生まれ出た。しかし「化石になつた卵」に閉じこめられたPlantはLucyの助けも得ることが出来ず、新しく生まれ変わることが出来なかつたのである。

3 分身との出会い

父親の死後しばらくして、クラブ住まいをしていたPlantはThurstonと名乗る若い男の訪問を受ける。彼はThurstonが偽名であり、本当の名はArthur Atwaterであると白状する。実は彼こそがPlantの父親を車で轢き殺した犯人であつたのだ。驚いたことに彼はPlantに金の無心に来たのであつた。父親を轢き殺したことに対する詫びと言ひ訳から始まつて、良心の呵責で眠れぬほど辛い思いをしていること、そのため神経が参りストッキングのセールスを続けることが出来なくなつたこと、職を失つてイギリスにいても運が向いてくるとは思えないので、ローデシアで運試しをしたいこと、その資金を融通してもらえれば二倍にして必ず返すこと、など蕩々と述べる。Plantにきつ

ぱり断わられると、彼は「有り金をはたいて葬儀の花輪を送ったのに」と恩着せがましい調子になる。Plantが花輪代金を返すというAtwaterは自分を見損なわないで欲しいと捨てセリフを残し帰っていく。しかしその夜Atwaterは再びLongという変名を用いてPlantに電話をかけ、やはり花輪代を払って欲しい旨を告げる。しかも昼間口にした値段よりも高くふっかけてくるのであった。初対面の挨拶でPlantはAtwaterに“a savage grip”で握手をされたように、この鉄面皮な男は今後彼の人生にがっしり入り込んでくるのである。

Atwaterという名前からAtwaterもまたPlantにとって意義のある人物であることが明らかである。光を象徴するLucy同様、「水(water)」も「植物(plant)」の成長に必要なものだからである。そして「水辺(at water)」で覗き込めば、鏡のように水に自分の姿が映る。しかし同時にその名はAtwaterが彼にとって危険もはらんだ人物であることも表している。「水」は創造もするが破壊もする。また浄化の役割を果たすこともあれば混沌を生み出すこともあるからである(Ad de Vries 493)。

William MyersはAtwaterの様なタイプの人間は“the upper-class Englishman's nightmare”¹⁰⁾だと言う。Plantは当然ながらAtwaterに嫌悪感を覚える。しかしAtwaterはPlantの対極にいる人物なのだろうか。HeathはAtwaterをPlantとの共通点を抱えた人物だと指摘する。例えば人目を避けて暮らすのが好きであること、あるいはAtwaterは所属するクラブではNortonという偽名で過ごしているが、そのこともPlantが娼婦に語った偽りの身の上話と匿名性という点で共通していることが挙げられる。そしてまさに“In essence, he is a parody of the state of John Plant's soul, a caricature-double, and he represents what Plant must overcome in himself before he can successfully change his style and grow up” (Heath 145)なのである。

何よりAtwaterがPlantの父親を殺してしまったことが大きな象徴的意味を持っている。成長する上で必要な父親との対決も、儀式としての「父親殺し」も経験しなかったPlantに代わってAtwaterがPlantの父親を本当に殺してしまったのである。Atwaterはその時の状況を次のように語っている。「Plantの父親が道を渡りかけているのが見えた。老人は自分の方をまっすぐに見てそこを動こうとしなかったの、驚かしてやるつもりでスピードを落とさずに近づいていった。轢いてしまってから彼がそこを動く意志がなかったのだと知った」(137)。それに対しPlantは父親がいつも「車を運転する輩は監獄に永遠に閉じこめておくべきだ」という意見を持っていたとAtwaterに話す。ここでは監獄に閉じこめられるべき人間のAtwaterに「化石になった卵」に閉じこめられている息子Plantの姿を重ねることが出来るのである。

しかしPlantはAtwaterと正面から対決したとは言えない。最初の出会いでこそ毅然とした態度を取ったPlantだが、動物園での偶然の再会で自らAtwaterとの関係を繋いでしまう。PlantがAtwaterと再会したのはLucyの陣痛が始まった時であった。彼女のことが心配で、それを紛らわせるために彼はAtwaterをその場で雇うことを思いつく。彼に1ポンドを渡し、どんなことでも良いからおしゃべりを続けて欲しいと頼むのである。彼らは連れだってクラブに行き、そして最後には酔った勢いとはいえPlantはAtwaterに“Why don't you come and live with me. I've got a house in the country, plenty of room.” (188)と自分の家で暮らすように勧めるのである。Lucyを失ってAtwaterと親しくなるということは以前の自分に戻ってしまうということに他ならない。こうして、父親の死によって自分を見つめるきっかけを得たPlantだったが、成熟した人間になることは出来なかった。それどころか彼は自己を確立するための努力を放棄し、自ら元の状態に戻ることを選択したのである。

結 び

以上見てきたように *Work Suspended* の John Plant の抱える問題は父親との関係から発生していた。彼が困難な問題に背を向け、親しい人々にも心を開く事が出来なかったのは父親との関係が希薄で他者との関わりがうまく結べなかったためである。また父親の家と Plant との結びつきに象徴されるように、彼は父親に縛られ自立できなかった。しかし、父親が事故死した事で、Plant が父の影響から逃れ自立した大人として生まれ変わる機会が巡ってくる。彼は父を象徴する父の家を売り、それが破壊されていく様を見届ける。そこには Plant の自立への意志が感じられた。しかし結局、助けとなる Lucy との関係も、対決しなければならない Atwater との関係も正しい方向に繋げる事が出来ないのである。作品はそこで終わっているが Plant は後書きで “Neither book—the last of my old life, the first of my new—was ever finished” と述べている (191)。新しい生活を望みながら、その機会を最終的に自ら放棄した Plant は結局以前の消極的な生き方しか出来なかったのだろう。この作品が未完となったのは Waugh が海兵隊に戻る事になり執筆が中断されてしまったためである。しかし主人公の Plant の生き方を考えると、彼は未完の小説にふさわしい主人公と言えることが出来るだろう。

注

- 1) Michael Daive, ed. Evelyn Waugh, *Diaries of Evelyn Waugh* (Boston : Little, Brown and Company, 1976) 433.
- 2) Evelyn Waugh の *Work Suspended* は 1942 年に 500 部限定の私家版が Chapman から出版された。1949 年には他の短編小説と併せた *Work Suspended and Other Stories* が出版される。Waugh は 1949 年版で 1942 年版を数カ所削除している。以下、テキストからの引用はすべ

て 1949 年度版のものとし、1942 年版からの引用については本文中に出版年を明記する。

- 3) Robert Murray Davis, *Evelyn Waugh and the Forms of His Time* (Washington D.C. : The Catholic University of America Press, 1989) 60.
- 4) Martin Stannard, ed. Martin Stannard, *Evelyn Waugh The Critical Heritage* (London : Routledge & Kegan Paul, 1984) 34.
- 5) Jacqueline McDonnell, *Waugh on Women* (London : Gerald Duckworth & Co. Ltd, 1986) 115.
- 6) Martin Stannard, ed. Nigel Dennis, *Evelyn Waugh The Critical Heritage* (London : Routledge & Kegan Paul, 1984) 228.
- 7) Evelyn Waugh, *Work Suspended* (Harmondsworth : Penguin, 1982) 107. 以下、テキストの引用は頁数を括弧内に示す。
- 8) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Images* (Amsterdam : North-Holland Publishing Company, 1974) 240.
- 9) Jeffrey Heath, *The Picturesque Prison* (Montreal : McGill-Queen's University Press, 1982) 142.
- 10) William Myers, *Evelyn Waugh and the Problem of Evil* (London : Faber and Faber, 1991) 56.